

令和 5 年 6 月 8 日現在

機関番号：15101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K01818

研究課題名(和文) 就業女性の乳がん検診未受診の要因分析と支援対策の構築

研究課題名(英文) Characteristics of breast cancer screening behavior among working women and factors that inhibit screening

研究代表者

藤原 由記子 (FUJIHARA, Yukiko)

鳥取大学・医学部・講師

研究者番号：20457336

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：日本の就労女性の乳がん検診受診行動に関わる属性の特徴と受診を阻害する関連要因を明らかにすることとした。鳥取県内の官公庁・企業4施設で就労する40～60歳代女性に、2019年4～5月に無記名自記式質問紙調査を実施した。本研究では、身近に乳がん経験者がいない人は、自分は乳がんにならないという信念や乳がんへの恐怖心をもっていたことから、不確かな知識に基づく信念や乳がんへの恐怖心は、乳がん検診受診の阻害要因になることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

がんの死亡者の減少を目指すため、他の国より低い日本の乳がん検診受診率を向上させることは重要である。そこで、日本の就労女性に着目し、乳がん検診受診行動に関わる属性の特徴と受診を阻害する関連要因を明らかにした結果、不確かな知識に基づく信念や乳がんへの恐怖心は、乳がん検診受診の阻害要因となることがわかった。本研究の結果から、正しい乳がんの知識を普及していくことが今後の課題であり、現在行われている教育機関と連携した若年層へのがん教育の中で、乳がんの教育内容を充実させることは、将来、乳がん検診受診率の向上につながることを示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to identify the characteristics and factors associated with breast cancer screening behaviors among working women in Japan. A questionnaire survey was conducted from April to May 2019 among women aged 40-60 years working at public offices and companies in Tottori Prefecture. Participants who did not know someone with breast cancer experience tended to underestimate their own risk and hold misconceptions about breast cancer, thereby discouraging screening.

研究分野：がん看護学 予防医学

キーワード：乳がん検診 就労女性 乳癌検診受診 定期受診を阻害する要因

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

がん検診は、一定の集団を対象としてがんの早期発見による必要かつ適切な診療につなげることにより、がんの死亡者の減少を目指している。乳がんは、初期の段階で発見されるほど5年生存率は高くなるため、検診で乳がんを早期発見することは重要である。アメリカやイギリスの乳がん検診の受診率は、70%を超え、乳がん死亡率は低下している。日本の乳がん検診受診率は、2019年は47.4%であり、乳がん死亡率の低下には至っていない。

### 2. 研究の目的

日本の就労女性の乳がん検診受診行動に関わる属性の特徴と受診を阻害する関連要因を明らかにすることとした。

### 3. 研究の方法

#### (1) 研究対象者

T県内の官公庁・企業から、便宜的標本抽出法 (convenience sampling) により、4施設に就労する女性を対象とした。施設代表者には、研究に協力いただけるよう、文書を用いて口頭で説明を行った。その結果、4施設から研究協力の承諾が得られ、そこで勤務する40~60代の女性1263名を対象とした。対象者の除外基準は、すでに乳がん罹患したことのある人、乳がん以外のがんに罹患し通院治療を行っている人、日本語を話せない人また識読できない人とした。

#### (2) 調査内容

調査票は2種類を用いた。まず一つ目は、「基本属性調査票」であり、すべての研究対象者に回答してもらった。その調査内容は、1. 年齢、2. 雇用形態 (正規職員、非正規職員)、3. 配偶者の有無、4. 子供の有無、5. 身近にいる乳がん経験者の存在の有無、6. 月に一度程度自己検診をしているか、7. 職場環境の雰囲気は乳がん検診を受診しやすいか、8. 雇用形態 (時間的拘束) は乳がん検診を受診しやすいか、9. 乳がん検診の定期的な受診状況、の9項目で構成した。二つ目は、「否受診の構造調査票」であり、研究対象者のうち、乳がん検診を定期的に受診していないと回答した者に回答してもらった。その調査内容は、乳がん検診を受診していない理由について、先行研究の調査項目を参考に、研究者が作成した。乳がん検診受診行動に影響を及ぼすと考えられる知識、環境、信念、感情の観点から、調査項目は30項目とした。乳がん検診を定期的に受診していない人に対して、4件法 (4. 強くそう思う、3. そう思う、2. そう思わない、1. 全く思わない) で回答を求めた。

#### (3) データ収集方法

調査票の配布にあたり、管理責任者から各部署に所属する40~60代女性の人数をあらかじめ報告を受け、各部署に配布できるように研究責任者が各部署の人数分の調査票と調査依頼書を封筒に分けて準備した。各部署に分けた封筒を施設ごとにまとめ、施設の管理責任者に手渡し、管理責任者の協力のもと対象者に調査票と調査依頼書を配布することとした。調査票の回収は、返信用封筒を用いた無記名個別投函とした。留め置き期間は1ヶ月としデータ収集期間は、2019年4~5月であった。

#### (4) データ分析方法

データの統計解析には、IBM SPSS Statistics version 26 for windowsを使用した。統計学的有意水準は5%とした。

対象者の基本属性と乳がん検診を定期的に受診していない理由について、記述統計を行った。

また、乳がん検診を定期的に受診している人と受診していない人に分け、基本属性に関して二乗検定を行った。さらに、乳がん検診を定期的に受診していない要因を明らかにするために、乳がん検診の定期的な受診行動の状況を目的変数、基本属性を説明変数としてロジスティック回帰分析（強制投入法）を行い、オッズ比を算出した。

乳がん検診を定期的に受診していない理由 30 項目（環境、知識、信念、感情に関わる要因）は、因子構造を確認するために因子分析（最尤法・バリマックス回転）を行った。さらに Kaiser-Meyer-Olkin の標準妥当性による検証を行った。最終的に構成概念的に最も妥当と思われる因子数を決定し、各因子内での内的一貫性に関しては、クロンバックの係数を算出し内的整合性を確認し、各因子項目を代表する名称を共通因子として命名した。

定期的に乳がん検診を受けていない人の特徴を明らかにするために、定期的に乳がん検診を受診していない人の基本属性と定期的に乳がん検診を受診していない理由における因子分析後に抽出された因子毎に算出した平均点について、1. 年齢（年代）は、3 群間比較のため Kruskal-Wallis の検定を行い、2. 雇用形態、3. 配偶者の有無、4. 子供の有無、5. 身近にいる乳がん経験者の存在の有無、6. 月に一度程度自己検診をしているか、7. 職場環境の雰囲気は乳がん検診を受診しやすいか、8. 雇用形態は（時間的拘束）は乳がん検診を受診しやすいかの 7 項目については、2 群間比較のため Mann-Whitney の U 検定を行った。

#### 4. 研究成果

調査票は 825 部（回収率は 65.3%）を回収し、データの欠損のない 668 部（有効回答率 81.0%）を分析対象とした。対象の平均年齢は 51 歳（ $\pm 6.8$  歳）であり、雇用形態は、非正規職員が多く、乳がん検診を定期的に受診している人は 6 割を超えていた。

データ分析の結果、1. 定期的に乳がん検診を受診している人は、正規雇用で、子供があり、身近に乳がん経験者があり、職場の雰囲気は検診を受診しやすいと感じ、職場の時間的拘束がない人であった。2. ロジスティクス回帰分析の結果は、乳がん検診を受診しない確率は、正規職員に比べて非正規職員が 5.905 倍に、子どもがいる人に比べていない人が 2.594 倍に、乳がん検診を受診しにくい職場の雰囲気だと思っている人が、そうでない人に比べて 2.338 倍に、身近に乳がん患者がいない人が、いる人に比べて 1.581 倍であると推定された。3. 定期的に乳がん検診を受診していない人は 243 人であった。乳がん検診を定期的に受診しない主な要因は、「面倒だから」「男性の医師や技師だと恥ずかしいから」「症状がなく心配ないから」であった。4. 乳がん検診を定期的に受診しない理由の構造は、18 項目 5 因子が抽出された。基本属性との関連では、身近に乳がん経験者がいない人は、自分は乳がんにならないという信念や乳がんへの恐怖心をもっていた。また、配偶者・子供がいない人、職場の雰囲気や仕事の時間的拘束によって受診しにくいと感じている人が、予定調整の困難を感じていた。

本研究では、身近に乳がん経験者がいない人は、自分は乳がんにならないという信念や乳がんへの恐怖心をもっていたことから、不確かな知識に基づく信念や乳がんへの恐怖心は、乳がん検診受診の阻害要因になることが明らかになった。そのために、乳がん罹患することを他人事のように捉えるのではなく、自分にも起こりうると気付き、過剰に不安を抱くことがないように、正しい乳がんの知識を普及していくことが今後の課題である。現在行われている教育機関と連携した若年層へのがん教育の中で、乳がんの教育内容を充実させることは、将来、乳がん検診受診率の向上につながる可能性がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	作田 裕美  (SAKUDA Hiromi)  (70363108)	大阪市立大学・大学院看護学研究科・教授   (24402)	
研究分担者	深田 美香  (FUKADA Mika)  (10218894)	鳥取大学・医学部・教授   (15101)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関